

463 肺癌組織に於けるHLA-DR抗原の発現について

筑波大学病理

○矢澤卓也，菅間 博，堀口 尚，飯島達生，
柴垣徳彦，小形岳三郎

HLA-DR抗原は宿主の免疫応答を制御する上で重要であり，異物情報を非自己抗原として生体免疫系へ受け渡す働きを担っている．これまでHLA-DR抗原は免疫担当細胞にのみ発現されると考えられていたが，最近，自己免疫疾患の標的細胞や甲状腺癌，大腸癌等の癌細胞にも，HLA-DR抗原の発現が見られるとする報告がある．我々は，インターフェロンの投与により肺癌培養細胞にHLA-DR抗原が発現されることを確認している．今回は，生体内の肺癌組織に於けるHLA-DR抗原の発現とその組織型，間質反応の程度について検討した．
対象と方法：扁平上皮癌11例，腺癌11例，大細胞癌10例，小細胞癌11例の手術材料のパラフィン切片を対象として用いた．HLA-DR non-polymorphic portionに対する抗HLA-DRモノクローナル抗体を用い，ABC法にて免疫染色し，顕微鏡的に検討した．

結果：肺扁平上皮癌 1例，腺癌 4例，大細胞癌 1例にHLA-DR抗原の発現が認められたが，小細胞癌にはHLA-DR抗原の発現は認められなかった．腺癌では比較的一様に陽性細胞が分布しているものが多かったのに対し，他の組織型では同一腫瘍内でも陽性細胞の分布は不均一で，腫瘍内の一部にのみ陽性細胞がみられた症例もあった．また，HLA-DR抗原陽性例ではリンパ球浸潤や線維性の間質反応が強い傾向がみられた．

465 肺腺癌におけるトランスフェリン・レセプターの発現と予後因子との関連

国立がんセンター研究所病理部

○近藤和也，野口雅之，向井清，佐藤雄一，松野吉宏
下里幸雄

目的：肺腺癌におけるトランスフェリン・レセプターの発現を免疫組織学的に検索し，組織病理学的予後因子との関連の有無を検討した．

方法：肺腺癌手術例58例のAMeX固定パラフィン包埋切片とトランスフェリン・レセプターに対するモノクローナル抗体 OKT-9を用いてABC法にて免疫組織化学染色を施行した．

結果：58例の肺腺癌における陽性率は76%で，癌細胞の細胞膜とともに胞体もほぼ均一に染色された．組織分化度では，高分化型で53%，低分化型で83%の陽性率であった．核異型度では軽度で12.5%，高度で95%，核分裂指数では，0.25%以下の症例で58%，0.26%以上の症例で96%であった．トランスフェリン・レセプターの発現と組織分化度 ($p < 0.025$)、核異型度 ($p < 0.025$)そして核分裂数 ($p < 0.001$)の間には相関があったが，TNM因子との間には相関が認められなかった．高分化型では核異型度，核分裂指数が高いほど発現が強い傾向があった．しかし，低分化型では核異型度とは相関なく，核分裂指数とのみ相関を示した．

結論：肺腺癌におけるトランスフェリン・レセプターの発現は腫瘍細胞の悪性度の指標，特に増殖能と関連し，予後因子の一つとなる．

464 HLA-class I, class II 抗原の発現より見た肺癌細胞の増殖，リンパ節転移の検討

長崎大学第一外科

○岡田代吉，田川 泰，安武 亨，草野裕幸，
岡 忠之，辻 博治，原 信介，謝 家明，
川原克信，綾部公懿，富田正雄

【目的】腫瘍免疫系のEffector細胞 (CTL, HelperT) が癌細胞を認識する為には，HLA-抗原の発現が必要であると言われている．癌の増殖，転移形成には種々の要因が考えられるが，癌細胞のHLA-抗原発現との関連の有無を確認する目的で，当科切除例の肺癌細胞のHLA-抗原発現を検討したので報告する．【対象と方法】1988, 9~'89, 5における切除肺癌45例．組織切片 (非癌部，癌部，リンパ節) をAcetone 固定を主とするAMeX法にて固定し，Paraffin包埋ブロックを作製．ABC法により組織染色を行いHLA-抗原の発現を評価した．【結果】HLA-ABC; class I 抗原は25/45例に発現しており，stage I, II が主であった．また発現例でリンパ球浸潤が強い傾向がみられた．リンパ節転移癌細胞では原発巣との不一致例が多かったが，5/10例に発現していた．しかしリンパ球の反応は明かでなく，今後，発現の強さ，変化等について検討する必要があると思われる．HLA-DR; class II 抗原は16/45例に発現を見たが，組織型による差が強く (Sq; 2/21, Ad; 13/17) ，特にAd, 分化型で均一な発現を認めた．これに対して，リンパ節転移例では発現がなく，腺癌においては，HLA-DR抗原が癌細胞の分化，増殖，転移と関連している可能性が考えられた．

466 肺腺癌におけるTGF α ・EGFR発現の意義

九州大学第二外科

○立石雅宏，金子 聡，矢野篤次郎，光富徹哉
石田照佳，杉町圭蔵

目的) 近年増殖因子と癌の進展・予後との関連が論じられている．我々は原発性肺腺癌における transforming growth factor α (TGF α)、及びその受容体である epidermal growth factor receptor (EGFR) と予後との関連を検討した．

対象) 1974年より1986年までに九州大学第二外科にて切除された原発性肺腺癌より術死・試験開胸を除いた134例を対象とした．男82例，女52例で平均63歳であった．方法) パラフィン包埋切片を用いてTGF α ，EGFRをABC法にて染色した．

結果) TGF α 陽性例は90例 (67%)，EGFR陽性例は57例 (43%)であった．TGF α は性，病期，分化度，根治度別に差を認めなかったが，EGFRの陽性率は $\ast N2, M1$ ，非治療切除で高かった ($p < 0.05$)．TGF α 陽性例の5生率は39%で陰性例の65%に比して低かった ($p < 0.05$)．しかし，EGFRでは陽性例は50%，陰性例は49%と差を認めなかった．尚，TGF α 及びEGFR両者陽性例の5生率は38%，一方で陽性例は49%，両者陰性例は55%であった．結論) EGFR陽性率はN, M因子，根治度に相関したがTGF α は相関を認めなかった．予後に関してTGF α 陽性例は予後不良であったが，EGFRは予後との関連は認められなかった．また，TGF α 及びEGFR両者陽性例は両者陰性例より予後不良の傾向があり，肺腺癌における autocrine mechanism が示唆された．